安中市立第一中学校　第３学年 学年通信　No５２

ジャンプ!!

令和３年２月１２日

受験生へのメッセージ Vol-3

全部自分のためになるから信じてやってみな

プロレスラー　棚橋弘至（たなはし ひろし）さん

新日本プロレスの大黒柱として、プロレスブームを支える棚橋弘至さん。「大卒レスラー」としても知られる棚橋さんですが、受験の時は猛烈な努力をしたといいます。

★１日最低１２時間勉強した

高校時代、プロ野球選手になりたくて、野球部の活動は一生懸命にやっていましたが、夏に甲子園の予選が終わると、中ぶらりんになりました。野球選手になれないなら、それを伝えるスポーツ新聞の記者になろうと思って、そのためには大学に行こうと、受験勉強を始めました。

実質勉強していたのは半年くらいです。偏差値は５０くらいでした。自分の学力がどれくらいかが把握しきれなかったので、手当たり次第に勉強して、塾に行って、地元の行けそうな大学から偏差値の高い大学まで１０校近く受けました。全部受かりましたね。とにかく戦う武器をそろえないといけないと思ったので、書店を回って、よさそうな問題集をチェックして、全部買ってきて、分からないところや間違えたところを補習しました。一番効率のいい方法を選びましたね。分かる問題や、できたところは２回やらない。できなかったところだけをやって、穴を埋めていきました。

僕は私立に絞っていたので、英・国・社の文系３科目しか勉強しませんでした。英語は自分で吹き込んだ英会話をイヤホンで聞いていました。僕みたいに部活ばかりやってきた生徒は体力勝負ができるんですよ。１日最低でも１２時間勉強して、寝ている時間以外は勉強していました。午前３時～４時まで勉強して、朝の７時には起きて学校に行きました。何となく大学に行きたいなというのだと、勉強にも身が入らないと思います。次の模擬テストで何点取るとか、あいつには勝ちたいとかでもいいのですが、新聞記者になるという目標設定がいち早くできたので、勉強に身が入りました。

息抜きにはプロレスのビデオをずっと見ていました。小橋建太さんとか武藤敬司さんが僕のアイドルでした。「小橋が頑張っているから、おれも頑張ろう」と、エネルギーをもらう感じですね。息抜きする時にはモチベーションを上げる何かに触れた方がいいですね。ただ何も考えずにボーッとするんじゃなくて。３０分でも１時間でも、うまく切り替えができる息抜きを見付けたらいいかなと。ダラダラと過ごしてしまうと、勉強にスイッチするのが難しいので。切り替えが上手になるのも受験対策の一つかなと思います。

運動にもウオーミングアップがあって、試合があって、クールダウンがあるように、受験勉強にもまずウオーミングアップが必要です。僕の場合は英単語や漢字をひたすら書き続けました。それからその日にやらないといけない問題や、勉強の量をこなして、最後にクールダウンします。自分の中で受験勉強のルーティンを固めてしまうと、意識しなくても集中した状態になれます。

★おれ、プロレスラーになれるじゃん

大学に入って学生プロレスのサークルに入りました。入学式の後、キャンパス内はサークル勧誘の人であふれましたが、コスチュームの人がウロウロしていたりとか、入場曲がかかっていたりとかしてプロレスサークルのブースがすごく目立っていました。高校時代にプロレスを語る仲間は２人くらいしかいなかったので、興味があって行ったら、みんなプロレス大好きで、しかも自分より詳しくて、「何だこの楽園は」と思いましたね。主な活動はみんなでプロレスを見に行くことでしたが、そこで学生プロレスもやりました。

もともと、ウェイトトレーニングは高校の野球部の頃からやっていたので、本格的に体を鍛え始めたら、６５キロだった体重が１年で８０キロになりました。当時、ジュニアヘビー級の人気があって、８５キロ、９０キロの選手もいたので、「もう少し体重を増やせば、おれプロレスラーになれるじゃん」と。肉体的な変化が夢に現実味を与えてくれました。 小さい頃から自分に自信が持てなかったので、強くなりたかったんですよね。プロレスが好きになって調べたら、プロレスラーは年間１３０試合くらいやってもケロッとしている。「この人たちはすごいな。おれもプロレスラーになったら、自分に自信が持てるんじゃないか」と、プロ野球選手になりたくてなれずに、新聞記者になりたくて大学に行ったんですが、今度はプロレスラーということで、夢がどんどん変化していきました。

大学の２年生の時に１回、３年生の時に２回、新日本プロレスの入門テストを受けまして、３回目で合格しました。当時はアントニオ猪木さんが引退していて、藤波辰爾さん、長州力さん、闘魂三銃士が活躍していました。プロレスラーになるには一日でも早く入った方がいいと、新日本に合格した時点で大学をやめようと思っていました。そうしたら長州さんに「卒業してから来い」と言われました。練習がきつくて逃げ出したり、けがをしてやめざるを得なかったりした人をいっぱい見ているので、「何が起こるか分からないから、とりあえず大学だけは出ておけ」ということだったと思います。長州さんがそう言ってくれたから、大学を卒業できたのだと思います。

★勉強に無駄はない

受験勉強がまさかプロレスラーにつながるとは、当時は少しも考えていなかったですね。受験勉強で頑張ったことが今の職業に就いても役立っているし、野球部の時の筋トレがプロレスに役立っているし、プロレスで学んだことがテレビや映画の仕事で役立っています。「なんで勉強しないといけないんだよ」と思っていても、「無駄なことはないな」と思いましたね。夢に向かって頑張ってきたことは、自分の財産であり、人としての厚みになっていくので。そう考えると、受験生には早い段階で「全部自分のためになるから。信じてやってみな」と気づかせてあげたいと思います。勉強に無駄はありませんから。

＜たはなし・ひろし＞
１９７６年岐阜県大垣市生まれ　立命館大学法学部卒業
卒業と同時に新日本プロレスに入門。ＩＷＧＰヘビー級王座８回、ＩＷＧＰインターコンチネンタル王者２回、ＮＥＶＥＲ無差別級王座１回など。得意技はハイフライフロー。

２０１７年１２月２４日　毎日新聞記事より（一部省略、見出し文は原文のまま）